原 著

観察者の存在が二者間の感情コミュニケーションに 及ぼす影響¹

—観察者との関係性の観点から—

山本恭子 神戸学院大学

**Emotional communication in the presence of an observer:
The effect of personal relationships between observer and dyad**

Kyoko Yamamoto (*Kobe Gakuin University*)

In everyday life, we communicate not only alone with another person but in front of others as well. Present study examined the effect of personal relationships between observer and dyad on facial behaviors during emotional communication. Pairs of friends viewed film clips that elicited positive affect and had a conversation in one of three conditions (a) observer absent, (b) stranger-observer, or (c) friend-observer. I video-recorded facial behavior of each participants and coded duration of smile, gaze and utterance. Participants filled out the questionnaire of emotion, public self-consciousness, internal other-consciousness, and satisfaction with conversation. Results showed that duration of utterance was longer in the friend-observer condition than the stranger-observer condition, but smiles and gazes did not differ among conditions. Observing by a friend seemed to facilitate emotional expressions on the intentional behavioral channel. Results of correlations between expressive behaviors and subjective indices suggest that friends made strategic use of nonverbal behavior in front of a stranger.

Key words: emotional communication, observer, personal relationship

日常場面において、コミュニケーションは二人きりの状況だけでなく、コミュニケーションの当事者以外の他者が存在する状況においても行われる。コミュニケーションは、自らの知識や意見、感情を表すために用いられることもあれば、消費的なおしゃべりのように単に時間を埋めるために用いられることもある（大坊, 1998）。このうち、お互いの感情を伝達するために行う感情コミュニケーションは、第三者の存在によって影響を受けやすいのではないと思われる。例えば、私たちは親しい友人と二人きりで話すような場合には感情を率直に伝えることができるが、電車や飲食店の中などの他者がいる前では二人きりの場合と同

じように振舞うことはできないだろう。第三者の存在は、二者間の感情コミュニケーションにおいて、表情をはじめとする表出行動にどのような影響を及ぼすのだろうか。この疑問を明らかにすることは、日常の感情コミュニケーションの理解に役立つことが考えられる。

Wagner & Lee (1999) は、他者の存在が感情表出に及ぼす影響を検討した先行研究をレビューし、共行為者 (co-actor) の存在が感情表出を促進するのに対し、観察者の存在が感情表出を抑制することを指摘している。観察者の影響に関する先行研究では、観察者が存在する条件としない条件における単独の実験参加者の感情表出を比較している。Kraut (1982) は、快または不快なおし刺激を、単独または他者がいる状況で実験参加者に呈示し、その際の感情表出の比較を行った。その結果、他者が存在する条件では単独条件と比べて、におし刺激に対する感情表出が抑制されることが明らかとなっている。Ekman (1972), Friesen

Correspondence concerning this article should be sent to: Kyoko Yamamoto, Faculty of Humanities & Sciences, Kobe Gakuin University, 518 Arise, Ikawadani-cho, Nishi-ku, Kobe 651-2180, Japan (e-mail: yamamoto@human.kobegakuin.ac.jp)

¹ 本研究は科学研究費補助金（若手研究（B）21730502）の助成を受けて行われた。

(1972) は、アメリカ人と日本人を対象に、ストレス喚起映像を呈示し、単独視聴条件と実験者が存在する条件での表情表出を比較している。単独視聴条件では、日本人もアメリカ人もネガティブ感情を表出したものの、実験者存在条件では、感情表出に文化差が見いだされた。具体的には、アメリカ人はネガティブな表情を表出したのに対して、日本人は笑顔を表出する傾向が見られたのである。この結果は、日本人には人前でネガティブな感情を表出してはいけないという表示規則があるためだと解釈されている。さらに、ポジティブな感情表出においても、観察者の存在による表情の抑制が見いだされている。成瀬 (1999) は、観察者の存在が快感情および不快感情喚起時の顔面筋電図に及ぼす影響を検討した。その結果、快感情喚起刺激の視聴時に、観察者あり条件では観察者なし条件に比べて、ポジティブ感情を反映する大頬骨筋の活動が小さくなることが示されている。

以上の研究は、いずれも観察者の存在が単独の実験参加者の感情表出に及ぼす影響を検討したものであった。一方、二者間の感情コミュニケーション事態を対象として、観察者の存在が及ぼす影響を検討した研究は少数しかない。Yamamoto & Suzuki (2012) は、面識のない観察者の存在が、二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響について検討を行った。この研究では、観察者の有無（あり、なし）と実験参加者ペアの関係性（友人関係、未知関係、単独の統制群）を操作した実験条件において、快感情喚起映像の視聴および会話を行わせている。その結果、未知関係のペアでは観察者の存在がパートナーに対する視線の表出を促進した一方で、友人関係のペアでは観察者の存在によっていかなる表出行動も影響を受けなかった。このことから、二者間の感情コミュニケーション場面では、単独の場合とは異なり、観察者の存在によって表出行動が抑制されない可能性が示唆されている。

二者間コミュニケーションにおける他者の存在の影響は、複数観衆問題の観点からも検討されている。複数観衆問題とは、異なる印象を与えたい二人以上の人物が同じ場面に存在するときに生じるジレンマを指す (Fleming, 1994)。笠置・大坊 (2009) は、異性との会話を同性から観察される複数観衆条件と、同性との会話を同性から観察される統制条件における表出行動の比較を行っている。その結果、統制条件に比べて複数観衆条件のほうが発話の生起頻度が多いことを見いだしている。笠置・大坊 (2009) が検討した両条件は、いずれも観察者が存在する状況であるが、複数観衆問題が存在するかどうかという状況の認知の違いによって表出行動が異なることを示唆している。

観察者が存在する状況においては、その観察者が面識のある人物であるのか知り合いであるのかによっても、状況の持つ意味が変わるのではないだろうか。上

述した先行研究は面識のない観察者の影響を検討してきた。面識のない観察者が存在する場面は公的状況としてとらえられる一方、友人などの知り合いが存在する場面は私的状況としてとらえられる可能性が考えられる。いくつかの研究により、公的状況と私的状況では感情表出の程度が異なることが指摘されている。中村 (1991) は、緊張した、形式的な、公然とした、リラックスした、非形式的な、私的な、の6つの状況において、幸福、悲しみ、怒り、恐れ、驚き、嫌悪の基本感情が、どの程度表出されるかについて質問紙調査を行っている。緊張した、形式的な、公然としたを公的状況とし、リラックスした、非形式的な、私的なを私的状況と分類して、分析を行ったところ、感情の種類に関わらず、私的状況よりも公的状況において表出の程度が低くなることを見いだした。また、井上 (2000) も質問紙調査によって、一緒にいる人や場所が感情表出の抑制に及ぼす影響について検討している。その結果、見知らぬ人が存在する状況ほど公的であり、同級生や親友が存在する状況ほど私的であると認識されやすいことが示唆されている。また、公的状況ほど表出抑制が強く、私的状況ほど表出抑制が行われないという、中村 (1991) と同様の結果を見いだしている。これらのことから、観察者との関係性によって状況の公的さの認識が異なり、二者間の感情コミュニケーションが影響を受ける可能性が考えられる。

観察者がいる状況においては、人は自意識が高まり、他者評価に敏感になることが指摘されている (Fenigstein, 1979)。また、このような状況では、他者への注意や関心、すなわち他者意識 (辻, 1993) も高まると考えられる。本研究では、関係性の異なる観察者がいることによって、感情コミュニケーションの当事者間での自己やパートナーへの注意や関心が異なるかをとらえるために、自意識と他者意識を測定する。自意識には公的自意識と私的自意識の二つが存在することが知られているが (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)、本研究では、自分の行動や外見など外から見える自己の側面に注意を向ける公的自意識に焦点を当てる。また、他者意識に関しては、他者の気持ちや感情などの内的情報に注意を向け、理解しようとする内的他者意識に注目する (辻, 1993)。観察者が面識のない人物である場合のほうが、面識のある人物の場合と比べて、公的自己意識が高まることが予測される。

以上のことから、本研究では、観察者とコミュニケーションの当事者との関係性が、二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響を検討することを目的とする。観察者との関係性によって公的自意識や内的他者意識が異なるかを検討するとともに、これらの主観的指標と表出行動との関連性についても検討を行う。

方 法

実験参加者

実験参加者は同性の友人ペア29組58名（男性22名、女性36名、平均年齢 19.29 ± 1.16 歳）であった。これらの参加者は、観察者なし群（12組24名）、未知観察者群（9組18名）、友人観察者群（8組16名）のいずれかに割り当てられた。実験参加者の募集は、心理学の専門科目や一般教養科目において行い、一つの時間枠に友人同士2名から3名で参加するよう依頼した。なお、3名で参加したグループは友人観察者群に割り当てられた。

観察者

未知観察者群においては、参加者と面識のない学部生4名から、参加者と同性である1名が観察を行った。これらの観察者に対しては、事前に実験内容および観察者の役割について説明を行っていた。

友人観察者群においては、3人組で実験に参加したグループのうち1名を観察者役に割り当てた。なお、観察者の決定のため3名でジャンケンを行ってもらい、勝者をその役に割り当てた。友人観察者に対しては、他の参加者が実験実施前の質問紙に回答している時間を使って、書面にて観察者の役割を教示し、実験者が内容の理解を口頭で確認した。

観察者用の説明用紙には、実験全体の流れ、実験中の課題、実験中の注意事項が記載してあった。実験中の課題としては、参加者の実験中の様子・態度や会話内容を簡単にメモ書きすることである旨を、記入例とともに記載した。また、注意事項は、用紙に書き込んだ内容を参加者に悟られないようにすること、参加者の気がそれるほどの凝視は行わないこと、実験中は参加者との会話を控えること、の3点であった。

感情喚起刺激

快感情を喚起するために、バラエティ番組“さんまのスーパーからくりTV”より抜粋した約2分間の映像を使用した。

装 置

Figure 1に実験室の配置図を示した。実験は隣り合う二つの部屋を用いて行われた。部屋的一方は実験者が機器の操作を行うコントロール・ルームであり、もう一方が実験室であった。実験室には、プロンプター（MPL-32W/E、Life-On社製）を設置し、刺激映像の呈示を行った。プロンプターは、刺激映像がハーフミラーに投影される構造となっており、その裏側からビデオカメラによる撮影が可能な装置である。プロンプターのハーフミラーの部分には、コントロール・

Figure 1. Arrangement of the experimental room

ルームに設置されたDVDプレーヤー（DMR-XP200-K、Panasonic）から出力した刺激映像を呈示した。また、ハーフミラー裏側にはリモートコントロール可能なビデオカメラ2台（EVI-D100、SONY）を設置し、コントローラーはコントロール・ルームに設置した。実験参加者が着席する椅子2脚は、プロンプターから1.5 mの位置に設置した。また、観察者が存在する条件では、実験参加者から見て右斜め前方約3 mの位置に観察者用の椅子を設置した。実験参加者後方の壁には小さな鏡を取り付け、実験参加者の表情を撮影したビデオに、TVモニター上の刺激映像が映るようにし、実験後の表出行動の解析において、各実験セッションの開始がわかるようにした。

質問紙

親密性 実験パートナーや観察者との関係性を確認するために、“全く知らない”、“顔見知り程度の間柄”、“友達づきあいをする程度”、“親友と呼べるほど親密な間柄”の4項目に回答を求めた。この項目において、後者三つの選択肢を選んだ参加者には、パートナーとの親密性について、“全く親しくない”を1とし、“非常に親しい”を5とする5件法で回答を求めた。いずれの参加者も実験パートナーを“友達づきあいをする程度”あるいは“親友と呼べるほど親密な間柄”と回答していた。また観察者に関して、未知観察者群ではすべての参加者が“全く知らない”、友人観察者群では“友達づきあいをする程度”あるいは“親友と呼べるほど親密な間柄”と回答していたことから、観察者の関係性の操作は成功していたと言える。なお、パートナーとの親密性は $M=4.07$ 点（ $SD=.61$ 点）、観察者との親密性（友人観察者群のみで回答）は $M=3.83$ 点（ $SD=.58$ 点）であった。

一般感情尺度 一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木、2000）は、感情を表現する形容詞24項目から構成され、“全く感じていない”を1とし、“非常に感じている”を4とする4件法の回答形式であった。

下位尺度は、各8項目からなる肯定的感情 (Positive Affect: 以下PAとする)、否定的感情 (Negative Affect: 以下NAとする)、安静状態 (Calmness: 以下CAとする) の三つであった。下位尺度得点は、1と回答したものを0点、4と回答したものを3点と換算した後、8項目の得点を合計することで求めた。

自意識および他者意識 自意識尺度 (菅原, 1984) から公的自意識6項目、他者意識尺度 (辻, 1993) から内的他者意識7項目を抜粋して用いた。これらの尺度は本来特性を測定するものであるが、本研究では表現を一部改変し、状態尺度として用いた²。なお、自意識尺度を改変するにあたり、小川・敦賀・小林・松田・廣田・鈴木 (2007) を参考にした。各項目に対し、実験パートナーに対して感じている程度について、“全くあてはまらない”を1、“非常にあてはまる”を7とする7件法にて回答を求め、下位尺度ごとに合計得点を算出した。

会話満足度 木村・余語・大坊 (2005) の項目の中から6項目を用いた。項目内容は、(a) 会話をうまく調整することができた、(b) 協力的に会話が進んだ、(c) ぎこちない会話だった、(d) 相互に興味を持って会話に取り組んだ、(e) 緊張する会話だった、(f) 好意的に会話できた、であった。会話全体の印象について、“全くあてはまらない”を1、“非常にあてはまる”を7とする7件法で回答を求めた。逆転項目 (c) および (e) の得点を変換した後、6項目の合計点を求め、会話満足度とした。

手続き

参加者が実験室に到着後、実験内容の概略説明を口頭と書面にて行い、実験参加への同意書に回答を求めた。実験への参加を拒否した参加者はいなかった。次に、未知観察者群では実験参加者と面識のない同性観察者1名が入室した。友人観察者群では、3名1組で来室した実験参加者のうち1名に観察者役を依頼した。なお、観察者には、説明用紙、映像セッション用の記入用紙、会話セッションの記入用紙を挟んだクリップボードを手渡し、説明用紙の内容を読むように依頼した。その後、すべての群の参加者に、実験パートナーや観察者との親密性に関する質問紙に回答を求めた。

質問紙への回答終了後、映像セッションを開始し

た。参加者に対して、今から約2分間の映像を見ること、映像は緊張せずリラックスして見てほしいこと、映像とは関係のない話をしないように教示した。さらに、観察者のいる群では、観察者が映像視聴中の様子についてメモを取る旨を説明した。その後、実験者はコントロール・ルームに移動し、刺激映像の呈示と、ビデオカメラによる参加者の表情の撮影を開始した。映像呈示終了後、実験者は実験室に戻り、一般感情尺度、自意識尺度、他者意識尺度への回答を実験参加者に依頼した。

次に、会話セッションを行った。セッションを開始する際に、会話時間は約5分間であること、先に見た映像に関する感想について自由に話すように教示した。観察者のいる群では、映像セッションと同様に、観察者に関する説明を行った。その後、実験者はコントロール・ルームに退出し、会話開始の合図とともに実験参加者の表情の撮影を開始した。なお、会話開始の合図はプロンプターのモニターに呈示した。会話セッション終了後、一般感情尺度、自意識および他者意識尺度、会話満足度に回答を求めた。

実験終了後、デブリーフィングを行い、実験中に表情表出をビデオカメラで撮影していたことを実験参加者に説明した。その後、実験参加者に実験中に撮影した表情を分析に用いることについての同意書に記入を求めた。

表出行動のコーディング

撮影された映像をもとに、2名のコーダーが笑顔、パートナーに視線を向ける行動、発話をコーディングし、映像セッションおよび会話セッションの各期間における累積時間を算出した。コーディングにはMicrosoft社製のVisual Basic ver.6で作成された時間分解能0.5秒のイベントレコーダー“Sigsaji (荒川・鈴木, 2004)”を用いた。コーダー間の一致率を算出したところ、 $r=.89\sim.99$ であった。分析には2名のコーダーの平均値を用いた。

結 果

表情データの使用を拒否した参加者を含むペア (2組4名)、実験中に俯くことが多いなど表情のコーディングが難しかった参加者を含むペア (4組8名) は分析から除外した。その結果、分析対象者は46名となった。各群の内訳は、観察者なし群8組16名 (男性4名、女性12名)、未知観察者群9組18名 (男性10名、女性8名)、友人観察者群6組12名 (男性4名、女性8名) であった。

表出行動

映像セッションにおける笑顔、視線、発話の累積時間をFigure 2に示した。各表出行動の累積時間につ

² 公的自意識の改変後の項目例は、“パートナーに自分がどう思われているのか気になった”、“どう振る舞えば良いのか気になった”などであった。内的他者意識は、“パートナーのちょっとした表情の変化でも見逃さなかった”、“パートナーの態度や表情を気をつけてみるようにした”などに改変した。Cronbachの α 係数により各セッションにおける信頼性を確認したところ、公的自意識で $\alpha=.89\sim.93$ 、内的他者意識で $\alpha=.88\sim.90$ と十分な値が得られた。

Figure 2. Means (+SE) of smiles, gazes, and utterances in the observer condition during film presentation

いて、群（観察者なし群、未知観察者群、友人観察者群）を実験参加者間要因とする1要因分散分析を行った³。笑顔の累積時間は、友人観察者群が最も大きな値を示したものの、分散分析の結果からは有意な効果は認められなかった ($F(2, 43) = 1.30, n.s.$)。視線の累積時間はどの条件においても短く、有意な効果は認められなかった ($F(2, 43) = 2.07, n.s.$)。発話に関しては有意な主効果が認められ ($F(2, 43) = 9.00, p < .01, \eta^2 = .30$)、多重比較の結果（以下すべての多重比較で有意水準5%とするTukeyのHSD検定を使用）、友人観察者群が観察者なし群や未知観察者群と比べて、有意に累積時間が長いことが示された。

会話セッションにおける笑顔、視線、発話の累積時間をFigure 3に示した。映像セッションと同様の分散分析を実施した結果、笑顔 ($F(2, 43) = 1.14, n.s.$) および視線 ($F(2, 43) = 1.81, n.s.$) においては、有意な効果は認められなかった。発話の累積時間においては群の主効果に有意傾向が認められ ($F(2, 43) = 2.46, p < .10, \eta^2 = .10$)、多重比較の結果、友人観察者群が未知観察者群よりも累積時間が有意に長い傾向があった。

主観的指標

映像セッションおよび会話セッションでの感情状態の平均値および標準偏差をTable 1に示した。映像セッションと会話セッションのいずれにおいても、PA得点その他の下位尺度得点と比べて最も高くなっており、快感情の喚起が問題なく行われていたと言える。群間で同程度の感情が喚起されていたかを確かめるため、群を要因とし、一般感情尺度の各下位尺

Figure 3. Means (+SE) of smiles, gazes, and utterances in the observer condition during conversation

Table 1
Mean scores and standard deviation of general affect subscales during each session

Observer		Film presentation		Conversation	
		M	SD	M	SD
PA	Absent	17.38	3.05	17.69	4.29
	Stranger	17.06	3.81	14.06	4.86
	Friend	17.75	4.09	15.92	4.32
NA	Absent	6.38	4.73	5.69	4.45
	Stranger	5.33	4.98	5.39	5.62
	Friend	2.92	2.50	5.58	5.57
CA	Absent	12.44	4.27	12.81	5.00
	Stranger	10.39	4.15	11.61	4.96
	Friend	13.50	3.23	13.58	4.40

度得点を従属変数とする分散分析を行った。映像セッションにおいてはすべての下位尺度において、有意な効果は認められなかった (PA: $F(2, 43) = .13, n.s.$, NA: $F(2, 43) = 2.19, n.s.$, $F(2, 43) = 2.41, n.s.$)。会話セッションにおいては、PA得点で主効果に有意傾向が認められ ($F(2, 43) = 2.73, p < .10, \eta^2 = .11$)、観察者なし群の得点が未知観察者群よりも高い傾向にあることが見いだされた。NA得点とCA得点については、有意な効果は認められなかった（それぞれ $F(2, 43) = .01, n.s.$, $F(2, 43) = .64, n.s.$ ）。

次に、映像セッションおよび会話セッションにおける公的自意識、内的他者意識、会話満足度の平均値および標準偏差をTable 2に示した（会話満足度は会話セッションでのみ測定を行った）。いずれのセッションにおいても、公的自意識と内的他者意識は友人観察者群で最も高い値であった。しかしながら、群を要因とする分散分析を実施したところ、群の主効果は認められず、公的自意識（映像セッション: $F(2, 43) = .46, n.s.$, 会話セッション: $F(2, 43) = .70, n.s.$ ）および、内的他者意識（映像セッション $F(2, 43) = .31, n.s.$, 会

³ 実験参加者の着席位置により、観察者の影響が異なっていた可能性がないかを検討するため、群×着席位置による2要因分散分析を実施した。その結果、会話セッションにおける発話でのみ、着席位置の主効果が有意であったが ($F(1, 40) = 4.29, p < .05, \eta^2 = .10$)、交互作用は有意でなかった。その他の指標においては、着席位置の主効果や交互作用は認められなかった。したがって、本文の分析においては、着席位置の要因は含めなかった。

Table 2
Mean scores and standard deviation of public self-consciousness, internal other-consciousness and satisfaction with conversation during each session

	Observer	Film presentation		Conversation	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Public self-consciousness	Absent	15.31	8.23	17.44	7.99
	Stranger	16.72	8.92	19.06	10.52
	Friend	18.58	9.89	21.83	10.60
Internal other-consciousness	Absent	20.56	9.74	26.31	7.91
	Stranger	19.56	8.25	26.44	10.33
	Friend	22.33	10.68	28.58	10.54
Satisfaction with conversation	Absent	—	—	32.69 ^a	6.42
	Stranger	—	—	25.83 ^b	6.97
	Friend	—	—	30.50 ^{a,b}	7.26

a), b): The results of multiple comparison

話セッション： $F(2, 43) = .23, n.s.$) の平均値の差は有意ではなかった。会話セッションにおける会話満足度に関しては、群を要因とする分散分析の結果、有意な効果が認められた ($F(2, 43) = 4.43, p < .05, \eta^2 = .17$)。多重比較の結果、観察者なし群が未知観察者群と比べて高い値を示した。

表出行動と主観的指標の相関関係

表出行動と主観的指標の関連を検討するため、Pearsonの積率相関係数をセッション別、群別に算出した。映像セッションでは、有意な相関関係がほとんど認められず、観察者なし群において、CA得点と笑顔 ($r = -.63, p < .01$) および視線 ($r = -.48, p < .10$) の累積時間との間に、負の相関が認められたのみであった。

会話セッションにおける表出行動と主観的指標の相関係数を Table 3 に示した。未知観察者群においては、複数の有意な相関関係が確認された。笑顔はPA得点、内的他者意識、会話満足度と正の相関関係を持ち、視線はPA得点および会話満足度と正の相関を、NA得点と負の相関を示した。観察者なし群においては、発話と公的自意識においてのみ、有意な負の相関が認められた。また、CA得点と視線の正の相関が有意傾向であった。友人観察者群においては、笑顔とCA得点においてのみ、正の相関が有意傾向にあった。

考 察

本研究の目的は、観察者との関係性が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響を検討することであった。表出行動の累積時間より、友人観察者群が未知観察者群と比べて、いずれのセッションにおいても発話の累積時間が長かった。中村 (1991) や井上 (2000) では、公的状況に比べて私的状況では感情表

出の強度や頻度が高いことが明らかとなっている。本研究において、観察者が友人である場合を私的状況、観察者が未知人物である場合を公的状況ととらえれば、友人観察者群と未知観察者群の違いは先行研究結果を支持するものと解釈することができる。しかしながら、私的状況であると想定される観察者なし群は、映像セッションにおいて友人観察者群よりも発話量が少なかった。したがって、状況の公的さという観点からのみ本研究結果を考察することは難しいと考えられる。このような先行研究との不一致の原因として、先行研究は感情表出の強度や頻度を対象としているのに対して、本研究の発話は純粋に感情だけを表出したものではなかった可能性が考えられる。本研究では音声の記録をしていなかったことから、発話内容がどの程度感情を反映したものであるか分析することはできなかった。ただし、発話の累積時間と感情状態との相関関係が有意でなかったことを考慮に入れると、発話は感情表出以外の手段としても使われていたことが考えられる。

発話においては観察者群による違いが認められた一方で、笑顔と視線に関しては群間差が認められなかった。このことは、観察者との関係性の違いは、言語的行動には影響する一方で、非言語的行動には影響しないことを示唆する。言語的行動は非言語的行動に比べて、より意図的で意識される程度が高いことが知られている (大坊, 1998)。したがって、実験参加者の共通の友人が観察者をつとめる友人観察者群では、意図的なチャネルによる表出行動が促進されたのではないかと推測される。一方、共行為 (co-action) 状況を扱った研究では、感情喚起刺激に暴露される状況において、友人関係のペアは未知関係のペアに比べて、表情表出を促進することが見いだされている (Jakobs, Manstead, & Fischer, 1999, 2001; 山本・鈴木, 2005,

Table 3
Correlation between subjective indices and expressive behaviors in the observer
condition during conversation session

Observer	Behavior	PA	NA	CA	Public self consciousness	Internal other consciousness	Satisfaction with conversation
Absent (<i>n</i> = 16)	Smile	.34	.12	.12	-.04	.01	.25
	Gaze	.09	-.31	.45 [†]	-.24	.17	.38
	Utterance	.02	-.13	.40	-.62**	-.35	.33
Stranger (<i>n</i> = 18)	Smile	.54*	-.31	.18	-.04	.50*	.41 [†]
	Gaze	.53*	-.50*	-.08	-.15	.11	.56*
	Utterance	.10	-.37	.06	-.34	.12	.28
Friend (<i>n</i> = 12)	Smile	.42	-.14	.51 [†]	-.10	-.23	.23
	Gaze	-.15	-.19	.02	.14	.08	.06
	Utterance	.34	-.08	-.01	-.46	-.44	.23

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

2007; Yamamoto & Suzuki, 2006)。観察状況と共行為状況の違いの一つに、感情喚起刺激を共有できるかが考えられる。感情刺激を共有できない状況にあったことが、友人観察者群において意図性の高いチャネルによる表出行動を促進し、友人観察者との映像情報や感情の共有につながったのではないと思われる。しかしながら、先述したように本研究では発話内容を記録していなかったこと、発話と感情状態との相関が有意でなかったことから、発話によってどのような情報が伝達されていたかは定かでない。今後、この点について明らかにするためには、言語内容の分析が必要となるだろう。

未知観察者群と観察者なし群の間では、いかなる表出行動にも有意な差は見いだされなかった。Yamamoto & Suzuki (2012) においても、面識のない観察者の存在は友人ペアの表出行動に影響を及ぼしておらず、本研究はそれを追認する結果となった。一方、単独の実験参加者の感情表出を扱った研究では、面識のない観察者の存在が感情表出の抑制をもたらすことが明らかとなっている (Ekman, 1972; Friesen, 1972; Kraut, 1982; 成瀬, 1999)。Wagner & Lee (1999) も他者の存在が感情表出に及ぼす影響をまとめたレビューの中で、観察者の存在が感情表出の抑制を導くことを指摘している。これらのことから、単独の人物における感情表出と、二者間の感情表出とで、観察者の存在が異なる影響を持つことが推測される。友人同士で感情コミュニケーションを行っている場合には、面識のない観察者を外集団人物として自分たちとは切り離して考えられるのかもしれない。つまり、友人同士の感情コミュニケーションは排他的であり、面識のない他者の影響は受けにくい可能性が考えられる。

表出行動と主観的指標の相関関係から、群によって

各表出行動と関連する主観的指標が異なる可能性が示唆された。特に、会話セッションにおいて群間で相関関係のあり方に違いが認められた。観察者なし群や友人観察者群では、主観的指標と表出行動との間に有意な相関関係はほとんど認められなかったのに対して、未知観察者群では笑顔や視線の累積時間と主観的指標との間に複数の有意な相関関係が示された。笑顔や視線の累積時間はともに、ポジティブ感情や会話満足度と正の相関を示した。このことから、未知観察者群ではポジティブ感情を強く感じているほど、笑顔や視線という非言語的行動を行っていた可能性が考えられる。また、笑顔は内的他者意識とも正の相関関係にあり、他者のこころの動きに注目していた者ほど、笑顔を表出していたことが推察される。したがって、未知観察者群では、笑顔や視線といった非言語的行動を用いることで、実験パートナー間で効果的な感情伝達が行われていたことが考えられる。Fleming, Darley, Hilton, & Kojetin (1990) は、友人とはこれまでに築いた共通の知識があるため、友人と未知人物が同時に存在する状況において、友人にだけ特別な情報を伝えられることを明らかにしている。Fleming et al. (1990) の研究3では、伝達者がビデオテープに録画した一つの映像メッセージを、伝達者の友人または未知関係にある人物に呈示し、各人物に正しい情報を伝えることができるかを検討している。その結果、映像メッセージから正しい情報を読み取る確率は、友人の方が未知人物と比べて有意に高かった。さらに、メッセージの伝達者は、情報伝達の一つの方略として、表情表出を用いていたことが示されている。本研究の未知観察者群は、友人と未知人物という異なる関係性にある人が同時に存在する状況にあったため、実験パートナーの友人にのみ理解できる非言語的行動を方略的に行っていたのかもしれない。

公的自意識や内的他者意識の程度に関しては、観察者条件による差が見られなかった。Yamamoto & Suzuki (2012)においても、面識のない観察者がいる条件とない条件で、友人関係や未知関係のペアの公的自意識や内的他者意識に差は見いだされていない。したがって、二者間の感情コミュニケーションにおける観察者の存在は、自意識や他者意識に影響を与えるものではないことが考えられる。しかしながら、本研究結果は、人前では自己意識が高まり他者評価に敏感になる (Fenigstein, 1979) とか、観察者の存在が公的自意識を高める (Buss, 1980) という従来の主張とは異なっている。この不一致の原因として、いくつかの要因が考えられる。第1に、観察者と実験参加者の人数比が考えられる。本研究では、2名1組の実験参加者に対して、観察者は1名と相対的に少ない人数であり、観察者としての影響力が弱まってしまった可能性が考えられる。観察者が2名以上の場合にも、これらの意識が影響を受けないのかについては疑問が残る。第2に、本研究では社会的に受け入れやすいポジティブ感情の喚起状況を対象としたため、自意識や他者意識が喚起されるような状況ではなかった可能性がある。この点については、ネガティブ感情の喚起状況を用いた検討が望まれる。

第3に、公的自意識や内的他者意識を、実験パートナーに対する意識に限定して測定したことが原因として考えられる。これは、観察者なし群と観察者のある未知観察者群や友人観察者群とで得点を比較することを意図したものであった。しかしながら、実験パートナーと観察者に対して、実験参加者が異なる自意識や他者意識を生じていた可能性も考えられる。笠置・大坊 (2010) は、異性との会話場面に同性の観察者が存在する複数観衆場面において、話者が会話相手と観察者に対して異なる自己呈示動機を生じることを示している。本研究の未知観察者群では、同じ場面に友人と未知人物という異なる関係性の他者が存在していたため、複数観衆場面であったと考えられる。そうであれば、未知観察者群においては、友人である実験パートナーと未知関係にある観察者に対して、異なる意識を持っていた可能性がある。今後の研究では、実験パートナーと観察者のそれぞれに対して自意識や他者意識を測定することが望まれる。

以上を要約すると、観察者との関係性は二者間の感情コミュニケーションに部分的に影響を及ぼすことがわかった。友人観察者の存在により言語的行動は促進されるが、非言語的行動の表出量は影響を受けないことが明らかとなった。また、未知観察者の存在は、表出行動の累積時間には影響を与えなかったものの、笑顔や視線といった非言語行動の表出方略に影響を及ぼした可能性が示唆された。今後、観察者の人数や、自意識や他者意識の測定方法で認められた問題点につい

て、さらなる検討が望まれる。

引用文献

- 荒川 歩・鈴木直人 (2004). しぐさと感情の関係の探索的研究 感情心理学研究, **10**, 56-64.
- Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- 大坊郁夫 (1998). しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝え合うか—サイエンス社
- Ekman, P. (1972). Universal and cultural differences in facial expression of emotion. In J. R. Cole (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*, 1971. Lincoln: University of Nebraska Press. pp. 207-283.
- Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 75-86.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 522-527.
- Fleming, J. H. (1994). Multiple-audience problems, tactical communication, and social interaction: A relational-regulation perspective. *Advances in Experimental Social Psychology*, **26**, 215-292.
- Fleming, J. H., Darley, J. M., Hilton, J. L., & Kojetin B. A. (1990). Multiple audience problem: A strategic communication perspective on social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 593-609.
- Friesen, W. V. (1972). *Cultural differences in facial expression in a social situation: An experimental test of the concept of display rules*. Unpublished doctoral dissertation, University of California, San Francisco.
- 井上 弥 (2000). 感情表出抑制に及ぼす人・場所状況と他者意識の効果 感情心理学研究, **7**, 25-31.
- Jakobs, E., Manstead, A. S. R., & Fischer, A. H. (1999). Social Motives, emotional feelings, and smiling. *Cognition and Emotion*, **13**, 321-345.
- Jakobs, E., Manstead, A. S. R., & Fischer, A. H. (2001). Social context effect on facial activity in a negative emotional setting. *Emotion*, **1**, 51-69.
- 笠置 遊・大坊郁夫 (2009). 複数観衆状況における非言語行動の検討 日本社会心理学会第50回・日本グループ・ダイナミックス学会第56回合同大会発表論文集, 496-497.
- 笠置 遊・大坊郁夫 (2010). 複数観衆問題への対処行動としての補償的自己高揚呈示 心理学研究, **81**, 26-34.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 (2005). 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 感情心理学研究, **12**, 12-23.
- Kraut, R. E. (1982). Social presence, facial feedback, and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 853-863.
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける

- 表示・解読規則 大阪大学人間科学部紀要, **17**, 115-146.
- 成瀬文枝 (1999). 表示規則が感情表出に与える影響—女性観察者との相互作用— 同志社大学文学部卒業論文 (未公開)
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
- 小川時洋・敦賀麻理子・小林孝寛・松田いづみ・廣田昭久・鈴木直人 (2007). 覚醒水準が隠匿情報検査時の生理的反応に与える影響 心理学研究, **78**, 407-415.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 辻 平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- Wagner, H. L., & Lee, V. (1999). Facial behavior alone and in the presence of others. In P. Philippot, R. S. Feldman, & E. J. Coats (Eds.), *The Social Context of Nonverbal Behavior*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 262-286.
- 山本恭子・鈴木直人 (2005). 他者との関係性が表情表出に及ぼす影響の検討 心理学研究, **76**, 375-381.
- Yamamoto, K. & Suzuki, N. (2006). The effects of social interaction and personal relationships on facial expressions. *Journal of Nonverbal Behavior*, **30**, 167-179.
- 山本恭子・鈴木直人 (2007). 他者との関係性が刺激呈示中および呈示後期間の表情表出に及ぼす影響 社会心理学研究, **23**, 1-9.
- Yamamoto, K., & Suzuki, N. (2012). Effect of an observer's presence on facial behavior during dyadic communication. *Perceptual and Motor Skills*, **114**, 949-963.

(2013年3月15日受稿, 2013年7月5日受理)